

蕉門の連句と源氏物語

浪本澤一

要旨

蕉門の付合つけあひの上に、「源氏物語」の巻々のどのような場面が取材されているか、そうした場面がどのような形象しやうさうされているか、それらのことを具体的に展望してみたのが本稿の要旨である。尚、詳しくは本稿の前文に記してある。

芭蕉時代の連句は芸術的密度が濃いものになったので、貞門・談林の行った百韻は長大に過ぎるものとなり、歌仙式を多く採用するようになった。歌仙式は発句から挙句まで三十六句である。発句の世界は一つだけで、その後交互に続く長短・短長二句ずつの付合つけあひによる三十五の世界が、それぞれに独立した世界を組み立てながら進行する。

連句様式はこのような変化を尚ぶ独特の芸術である。即ち、花鳥風月のほかに広く世帯人情の世界が千変万化しながら展開して行く。連句芸術の面白さはその変化にあるのだ。科学的な随筆家として著名な寺田寅彦（一八七八—一九三五）は「あらゆる芸術のうちで其の動的な構成法に於て最も映画に接近するものは俳諧連句であらうと思はれる」として、付合つけあひにおける二つのショット（shot）のモンタージュ（montage）的構成による心像を映画の光学的映像に譬えている。詳しくは記さないが、その所論は、蕉門の連衆れんじゅうの行った連句芸術を近代的価値観において捉えたもので、今も斬新で興味ぶかい内容を胎んでいる。

西鶴の「好色一代男」は「源氏物語」の近世的翻案であるが、蕉門の遣った連句の付合にも「源氏物語」の面影おもかげを寄せた付合が出てくる。これを「芭蕉七部集」を中心にして言えば、「曠野」から「猿蓑」へ至る時期の連句に「源氏物語」を本説とした付合が目立つのであって、都鄙の蕉門の間に広く「源氏物語」の愛読された証跡が汲みとられるのである。

ところで、蕉門の付合の上に、「源氏物語」の巻々のどのような場面が取材されているか、そうした場面がどのように活現されているか、こ

れらの事を具体的に観察し展望してみたのが本稿の要旨である。

連句は複数作者で興行する座（組み）の芸術であるゆえ、相手を待たせて考えるといった余裕はなく、打てば響くごとく互に敏速に対応して行かなくてはならない。芭蕉の直門の間にはそうした修行が日頃から充分になされていた。

連句の面白さは世帯人情の句の連綿にあるが、それらの中で故事に取材した付句をすることは、そこに一つの見せ場を造ることであって、古典における確かな予備知識を必要とする。例えば、前句の胎むなま句すまわち余情を敏速に感受して、「源氏物語」の面影を寄せるといふことは、「源氏物語」を余程味読していない限りできないことであって、それを遣っていることは蕉門の連衆の「源氏物語」への反応がいかに鋭敏であったかを思わせるのである。

本稿は、付合に潜むひそ「源氏物語」の面影を指摘するだけにとどめず、付合の胎む「源氏物語」の内容を余言に渡るまで書き加えておいた。それは偏に老書生の憐心からであって、蕉門の付合と、その本説である「源氏物語」に寄せるひそかな敬意と愛情の念に出ていることに外ならない。

1

紅の脚布ミジロキ 哲姿ミジロキ むごかりし 嵐雪

五十イッジの内侍ないし 恥しはらぬかも 同

花の宴御密夫の聞えあり 其角

天和三年、其角編『虚栗』の嵐雪・其角の両吟歌仙「我や来ぬ」の巻は、発句から挙句まで三十六句、すべて恋の付合から成る特殊な一巻である。この巻、名残の裏、三句目から五句目までの付合。

前句に「みじろき姿むごかりし」とあるを咎めて、「五十の内侍」と趣向を立て、乱れる「紅の脚布」とあるに「恥しらぬかも」は一句の作である。この付合、「五十の内侍」とあるので源氏物語、紅葉賀の巻の源内侍に取材した俳諧とわかる。源氏十九歳、内侍五十八、九歳のときのことである。源内侍は、物語の主流からは外れた脇の女性の一人として登場するのであるが、物語のヒロインとして拵えられたところのある女性よりも、人間的な生地を綻ばせる傍流の女性の方に俳諧的な興趣をそそるものがあり、嵐雪と其角がこの老内侍に取材したのもそうした面白さからに他ならない。

物語の描く源内侍は、人柄もよく、嗜みもふかく、琵琶を弾いては「殊にまさる人なき上手」とあるが、年に似合わず色っぽい性分で、その方面では蓮っ葉なことを言ったり為たりする。さすがに源氏は、呆れて、冷淡にもてなすのを、女はそれをただ恨めしくのみ思っているのだ、あまり知らぬ振りもできなくて、「裳の裾を引き驚かし給へれば、蝙蝠（紙の扇）のえならず画きたる（美しい絵を描いた扇）を、さし隠して（かざして顔をかくして）、見かへりたるまみ（見返った眼差）、いたう見延べたれど（此方を流し目に見るのが）、目皮いたく黒み陥りて（臉がひどく黒み、落ちくぼんでいて）、いみじうはづれそそけたり（扇の外に髪

毛が乱れさがっていた）」とある。付合の「紅の脚布」はもとより嵐雪の俳諧であって、物語にはその場の一興に「裳の裾」を引いてみたところ。

次の付合は、前句に「恥しらぬかも」とあるより「御密夫の聞え」と趣向を立て、「内侍」の位に「花の宴」は一句の作である。但し、源氏物語の花宴の巻に現われるのは朧月夜の君（弘徽殿女御の妹）であるゆえ、「五十の内侍」に「花の宴」の場は当たらない。が、これらの付合は、そうした本説に頓着することなく、好色の老内侍を素材にして自在な俳諧を遣っているのである。

紅葉賀の巻には、源内侍の歌「立ちぬる人しもあらしあづまやにうたてもかかる雨そそぎかな」に答えて、源氏の「人妻はあなわづらはしあづまやのまやのあまりも馴れじとぞ思ふ」の返歌がある。内侍が、訪れてくれる人もなく泣きぬれている、と誘いをかけたのに対して、源氏が、人妻と関係を持つのは気が重いので、あまり親しくなりたくないのだ、と言う。続いて地の文となり、「とて、うち過ぎなまほしけれど、あまりはしたなくやと思ひかへして、人に従へば、すこしはやりかなる戯れ言（すこし上ついた冗談）など言ひかはして、これも珍しき（これに時に一興であるという）心地ぞし給ふ」とある。源氏は、素気なくうち過ぎてしまうのも、思い遣りがなさすぎると思い返して、いっしょに内侍の局に這入って行ったのである。この辺りに取材して、付合の「御密夫」は其角の俳諧である。

源氏物語に登場する女人群像の中で、「あはれ」に対する「をかし」

の標本のごとく描写されているのが源内侍にかかわる挿話であって、この老内侍を取材しているところに『虚栗』の俳諧の笑い中心の遊蕩趣味が象徴的に現われていると言える。付合に見られる「紅の脚布」・「御密夫」といった露出的な用語表現がそれであって、『虚栗』は談林俳諧の散文的余臭を濃くとどめており、いまだ蕉風の俳諧とは言えない性格のものである。談林から蕉風への過渡期にある新風と見るのが正当な評価であろう。

上掲の付合は、源氏物語の情趣を破壊するところに爆発的な俳諧の笑いを見出しており、『虚栗』はそうした活力を持っていて面白いのであるが、これを芸術作品としてのグレードの上から観照するとき、いまだ詩としての純化を遂げていない段階にある。蕉風の俳諧は、源氏物語における品の良い「あはれ」と「をかし」の情趣を温存して、なつかしさ、ゆかしさの匂う俳諧芸術を創作しており、恋句の付合においても、用語の選択に意を注ぎ、滋味のある俗語を活用し、「紅の脚布」・「御密夫」といったような露出的な用語表現は行わなくなるのである。

2

たそがれを横にながむる月ほそし 杜国
となりさかしき町に下り居る 重五

貞享元年の冬、芭蕉が野ざらしの吟旅の途次、名古屋の地で尾張の連衆を指導して巻いた『冬の日』は、蕉風俳諧の開幕を告げる画期的な撰

集であり、芭蕉七部集の第一集として古来名高いものである。五歌仙の巻首は、芭蕉の「狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉」を立句とした巻であって、その初裏に出ている付合。

前句は、三日四日頃の夕月を横に眺めるといので、句の余情にあるものは寂しく心細げな気趣である。付合は、其人を身柄もつ女人の余所目を憚る体と見立て、小家の立ち並ぶ市井に侘び住みしているさまを寄せている。蕉門の越人が書いた『冬の日』の注に「夕顔の宿、飛鳥井の姫君などの、いやしき所にかくれ居給ふ所、可合」とある。本説はどちらと限らないが、蕉門の付合に好んで取材されているのは何と云っても源氏物語であるゆえ、ここも「夕顔の宿」と見ておく方がより好ましいであろう。

源氏は、十七歳の夏、五月雨の降りつづく夜、内裏の宿居所で、葵上の兄の頭中将や、左馬頭・藤式部丞といった、その道の好き者からさまざまな珍らしい女性論を聞いた。帚木の巻に出ている「雨夜の品定め」である。その座において頭中将が行方知れずなった愛人の懺悔話をした。その女人が夕顔の君であって、二人の間には三つばかりになるかわいいた娘もいた。この娘が後の玉鬘の君である。夕顔の君は、頭中将の正妻の恪気を畏れて、京も五条辺の細民の雑居する下町に身を隠してまった。

夕顔の巻に「隣りの家々目さまして、あやしき賤の男の声々、あはれ、いと寒しや。今年こそなりはひにもたのむところ少なく、田舎の通ひも思ひかけねば、いと心ほそけれ。えい、北殿こそ聞き給ふや、など

言ひかはすも聞ゆ。いとあはれなるおのがじしの営みに、起き出でてそめき騒ぐも程なきを、女いと恥かしく思ひたり」とある。この段の情景を句作りした付句と見られる。本文に「女いと恥かしく思ひたり」とある句（お）を受けて、その女が身柄ある女であることを現わしている。但し、夕顔の君には宮仕の経験はないので、「下り居る」の語はそのままには当てはまらない。が、ここは上品な人のむさくるしい下町に侘び住みしているという程の意に解しておけば足りよう。また句中の「さかし」は「険し」の意ではなく、「賢し」の諸意にも適切に当てはまるものがないが、「隣さかしき町」とあるゆえ、隣家から聞えてくる話し声の聞き辛く騒がしいという程の意に解しておいて良いと思われる。俳諧の用語はこうした際どいことばが感覚的に用いられており、このような例はさして珍らしくないのである。

蕉風の俳諧は、本説を大切にするが、それをそのまま直付（じまづけ）にすることを嫌い、その面影ばかりを自在に句作りする。即ち本説に縫（ぬい）らず、本説を曲げず、本説の面影を懐かしく句やかに付句していくところに蕉風俳諧の独自性を出している。

3

狐つきとや人の見るらむ 越人
柏木の脚気の比のつくづく 野水

元禄二年、『曠野』は『冬の日』・『春の日』につづいて、編者は荷（か）兮（けい）

であるが、同年三月の芭蕉の序文を掲げている。その時期は芭蕉が奥の細道の旅に立つ前に当たる。連句は、員外として、歌仙九巻と半歌仙一卷を収める。その巻首の「表をわすれ」の巻、名残の表の付合。

前句、「狐つき」とあるを恋病みからの放心と見立て、源氏物語、柏木の面影を寄せた付けである。「つくづく」とは、柏木が、恋の物思いから病を得て、つくねんと籠りいるさまである。

柏木のこととは若菜の巻（上・下）に出ている。朱雀院の姫君（おんなぎみ）女三の宮が源氏に降嫁する前、この君に思いを寄せていたのが内大臣の子息の柏木（衛門の督）である。かれはその後もこの宮を諦めきれず、六条院で蹴鞠（まり）の会が催された春の日、猫のいたずらで御簾（みすだ）の裾があらわにめぐれ上り、偶然にも宮のひとときわ目立つ艶（あや）やかな桂姿（つばきざし）を見てしまった。それからの柏木は女三の宮の幻影のとりこになってしまふ。

このような時に、紫の上が物怪（もののけ）に見入られてにわかになんか氣を失い、静養のために二条院に移り、源氏はその看護に明け暮れて、新邸の六条院はがらあき同然になつてしまった。柏木は、この間隙に女三の宮の許に忍び入って、心の幼い宮を犯すのである。宮は懐妊して男子を産む。後の薫（かおる）の大将である。嘗て源氏は、青春の血のさわぐに任せて、天帝の後の后（きさき）である藤壺（ふじのつぼ）の女御（にようご）との間に犯した罪を思い起して、慄然とする。しかし、太政大臣という現在の体面を考えて表面はなに食わぬ顔をしているが、柏木は源氏の無言の威圧に堪えかねて、心身ともに衰弱して引き籠る。

源氏は、紫の上の病氣も立ち直ったので、延びのびになっている朱雀

院五十の賀を催すことにし、その試楽に音楽に秀でた柏木を招待する。その答札に参上した柏木の辞に「春の頃ほひより、例もわづらひ侍る乱り脚病といふ物、所せく起り患ひ侍りて、はかばかしく踏み立つることも侍らず、月頃にそへて、沈み侍りてなむ、内裏などにも参らず、世の中あと絶えたるやうにて、こもり侍る」(若菜、下)とある。柏木は、源氏を畏れて、病を得、引き籠っていたのである。野水の付句「柏木の脚気の比のつくづく」とは、これらのことを余意においての俳諧である。

なお、蹴鞠の上手な柏木が脚気をわずらったとあるのは、物語の作者紫式部の例の胡椒を利かせた諧謔である。蕉門の俳諧者が源氏物語を愛読した一半は、物語の随所に見られる痛烈な諧謔味にあったと考察される。

4

おもひがけなきかぜふきのそら 傘下
真木柱つかへおさへてよりかゝり 越人

『曠野』の越人・傘下の両吟歌仙「月に柄を」の巻、初裏の付合。

前句は、思いがけず空が曇り、一陣の風が吹き出したという天象の句である。付句は、天象の異変から人事の異変を呼び出したもので、源氏物語、真木柱の君の面影を寄せている。一句の意は、真木柱の君が瘡の発作を起して、家の真木の柱(檜の柱)に寄りかかっているというのであるが、この君が瘡を起したなどは本文のどこにも書かれてない。前

句に「おもひがけなき」とあるを咎めて、「つかへおさへて」と響かせた作者の俳諧であって、この「つかへ」の語に他の重大な意味を含ませているのである。即ち、真木柱の君が常日頃寄りなれた真木の柱を出すことで、この君の面影を寄せ、「つかへおさへて」の余情に父親の髭黒の大将が惹き起した家庭争議を匂わせており、そこにこの付句の作為がある。

源氏物語、真木柱の巻は、髭黒の大将が源氏の君(太政大臣)や螢兵部卿の宮(源氏の異母弟)を尻目にして、内大臣(昔の頭中将)の娘玉鬘の君をまんまと手中に入れたことが発端となって家庭争議が持ち上る。玉鬘の母の夕顔は、気だての優しい、大様な性質で、男からすればただかわいいといった女性であった。が、娘の玉鬘は父親の血を受けて心ばえのしっかりした女性に成人し、しかも母親にまさる容姿を具えていた。中年の源氏は、玉鬘に思いを抱くのであるが、さすがに今は若いときのようなむやみなことはせず、玉鬘も感情に溺れることなく、よき程の距離をおいて源氏に応待する。こうした玉鬘を手に入れたのであるから大将の得意はたいへんなものである。

大将の北の方はよく出来た女性であったが、物怪に悩んで、時折り正気を失うことがあり、夫婦仲もだんだん余所々々しくなっていた。雪の降りしきるある夜、それも夜更けてから大将は玉鬘の許へ出かけようと、いそいそと盛装をこらしている。北の方は、胸の悲しみをじっと抑えていたのであるが、突然立ち上って大きな伏籠の下にあった薫炉を取り上げるや、大将のうしろからさっと浴びせかけた。あたり一面に濛々

と灰が舞い上った。父親の式部卿の官は、この事件を大将の不行状からと立服して、北の方と三人の子供を本邸に引き取る段取りをする。

十二歳の真木柱の君は、父の家を去るのが悲しくて、常日頃寄り慣れた東面の柱に託して、心の思いを陸奥紙にほんの一筆書き、柱の干割れた隙間に笄の先で挿し入れた。その歌は「今はとて宿かれぬともなれ来つるまきの柱はわれをわするな」であつたが、みなまで書く元氣もなかつた、とある。

この巻は、夫婦いさかひの「をかし」と真木柱の君の「あはれ」を交ごも思わせる筋で、蕉門の俳諧者の興趣を抱きそうな巻の一つと言えらる。越人が付句に取材したのはさすがであり、上手に出来ている。但し、この付句の「つかへおさへて」は俳諧の虚に傾斜し過ぎていて、真木柱の君を取材した句としては品を欠く憾みが残る。源氏物語を始めとして故事に取材した付合は虚実皮膜の演出するのが蕉風における面影の付けの理想である。

5

あの雲はたがなみだつゝむぞ 芭蕉
行月のうはの空にて消えさうに 越人

『曠野』の「雁がねも」の巻、名残の表の付合。

前句に「誰が涙」とあるより、源氏物語、夕顔の君の面影を寄せた付句である。京の五条辺に侘び住みしている上品な女がいて、源氏は、そ

の女の許に足繁く通う。八月十五夜の月が山の端に入りかねている明け方、女を車に乗せて、ほど近い所にある古い別荘に連れ出す。夕顔の巻に「いざよふ月に、ゆくりなくあくがれんことを、女はさすがに思ひやすらひ、とかく宣ふほどに、俄に雲がくれて、明け行く空いとをかし」とあり、「なにがしの院におはし着きて、あづかり召し出づる程、荒れたる門のしのぶ草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し」とある。別荘には留守番の男がいるだけ。木草が陰鬱に生い繁り、庭園のような荒れかたをしていた。源氏の歌「いにしへもかくやは人の惑ひけむ我まだ知らぬしのめの道」に答えて、女は「山の端の心もしらで行く月は上の空にてかけや絶えなん」と、何か不吉な運命を予見するような心細い気持を呟く。

付句は、女の歌を踏まえており、越人の手に成る句は「消えさうに」の五文字に過ぎないが、折りからの有明けの月に託して、女のはかなげな心細い気持を巧みに現わしている。夕顔の君を面影に見せた上手な付合と言える。

蕉門の俳諧者にとって、夕顔の巻は興趣をそそる巻の一つであつたらしい。この巻を素材にした付合はまだ他にも出てくるので、前後にわたつて多少の重複はあるが、この巻の素描をしておく。

源氏が、六条の御息所の許に微行していた頃、内裏からの中宿に乳母の家があつた。その乳母が大病をして尼になつたのを見舞つたときのことである。その家のある五条の辺は貧しい小家の立ち並ぶさみしい処であつたが、周りに檜垣をめぐらし、涼しげな簾を垂らし、女たちのちら

ほら見える家があつて、軒のつまに夕顔の白い花が咲いていた。源氏は、内裏では見かけない花よと思ひ、隨身にあの花を一房折つて参れと命じる。隨身が門のうちに這入つて、折ろうとすると、愛らしい姿の女童が出てきて、「これに乗せて参らせよ、枝もないような見栄えのしない花です」と言つて、白い扇を渡してくれた。その扇には薰物の香が沁みこんでおり、時宜に適つた歌が風流に散らし書きにしてあつた。その歌「心あてにそれかとぞ見るしら露のひかりそへたる花の夕顔」。源氏は、この扇の女に強く心を魅かれ、腹臣の惟光にそれとなく探索を言いつける。惟光は、例の「うるさき御心」が出たと、苦りながらも、家の様子を隈なく尋ね、この家の主と思われる女が愛すべき女であることを報告する。源氏はこの女の許にひそかに通いはじめめる。そして今まで正妻の葵の上や高貴な六条の御息所についぞ見なかつた、なつかしい女の魅力を覚えるのである。今朝がた別れたばかりなのに、昼の間が待ち遠しく物狂おしくなるほど溺れこむ。しかし、源氏は粗末な狩衣に車も目立たなく裏した微行であり、女もまた自分の素性を明かすことをしない。源氏は、中秋の月の雲隠れする明け方、供人をわずかに連れただけで、とある別荘にこの女を連れ出す。別荘の庭は廢園のごとく荒れるにまかせられていた。その夜、枕上に凄艶な女の生霊が影のごとく現われる。その妖氣に見入られて、女は氣を失ひ、そのままあつて死んでしまうのである。この薄命の女が夕顔の君である。

6

水ゆるされぬ黒髪ぞうき 等 躬

まだ雛をいたはる年のうつくしく 須 竿

元禄二年、「奥の細道」の吟旅の際、須賀川の可伸庵において、芭蕉の「かくれ家や目だたぬ花を軒の栗」を立句にして卷いた歌仙、名残の表に出ている付合。『伊達衣』所収。

前句に「黒髪ぞうき」とあるを、黒髪を梳くを厭がられると見立て、源氏物語、若紫の面影を寄せた付句である。前句の「水」は、泔杯に入れた米のとぎ水で、これを髪につけて梳いた。

源氏、十八歳の春、瘡病（おこり）の加持を受けに北山の峯に大徳を訪ねて行つたときのことである。山の桜は今が盛りで、ここかしこに僧房が見渡される。すぐ近くに見える一房は、小柴垣を小綺麗に結び巡らし、木立を透かして、清げな家や廊などをつづけており、かわいい女童等の姿もちらほら見える。源氏は、腹臣の維光を供にして、春の日永の夕がすみに紛れて逍遙し、この家に四十ばかりの品の良い尼君と美しい少女の姿を垣間見るのである。尼君は病氣の静養のために兄の僧都の許に来ており、美しい少女は尼君の孫の若紫である。その巻に、

「尼君、髪（若紫の髪）をかき撫でつつ、梳ることをうるさがり給へど、をかしの御髪や。いとかなうものし給ふこそあはれに後めたけれ。かばかりになりぬれば、いとかからぬ人もあるものを、故姫君（尼

君の娘で、若紫の母）は十二にて殿（尼君の夫、故按察大納言）に後れ給ひし程、いみじう物は思ひ知り給へりしぞかし。ただ今、おのれ見捨てたてまつらば、いかで世におはせむとすらむとて、いみじく泣くを見給ふも、（源氏は）すずろに悲し。幼心地にも、（紫は）さすがに（尼を）うちまもりて、伏目になりてうつぶしたるに、こぼれたる髪、つやつやとめでたう見ゆ」とある。

付句は、源氏が僧都と尼君を通じて、この美しい少女即ち若紫と近づきになつた後を言っている。その段に「難遊にも絵描い給ふにも、源氏の君とつくり出でて、清らなる衣着せ、めでたき物にかしづき給ふ」とある。このあたりを面影に見ての付句であつて、句作りも句やかに出来ている。一座した芭蕉の助言も加わっているように思われる。

尚、末摘花の巻の末にも「二条の院におはしたれば、紫の君、いとも美しき片生にて」とあり、源氏が、紫の君といつしよに難遊びをしたり、絵を描いたりして遊戯する情景が出ている。源氏は、自分の鼻に紅を塗りつけて、紫の君をひどく笑わせる。そのあと真顔になつて、紅が鼻に染みついてとれないと戯れる。女君は本気に心配して、男君のそばに寄つて行つて、硯の水指の水に濡らした陸奥紙で、男君の鼻についた紅を拭きとつて上げたりする。紫の君の明るく艶美な姿が鮮やかに描写されている。源氏、十九歳、紫上、十一歳の頃のことである。

7

寝まきながらのけはひ美し 翁

遙けさは目を泣きはらす筑紫船 露丸

元禄二年、出羽国鶴岡の長山重行亭において、芭蕉の「めずらしや山をいで羽の初茄子」を立句とする歌仙一卷、その名残の表の付合。曾良の『奥の細道随行日記』所収。

前句「寝まきながらの化粧」とあるを、急場の旅立と見立て、付句の「筑紫船」に、海路はるばる京の都に逃げ帰った玉鬘の君の面影を寄せている。

源氏物語の女性群像の中で、玉鬘の君は数奇な運命をたどつた姫君である。母の夕顔の君が、源氏に連れ出されて五条辺の隠れ家から姿を消してしまつたとき、玉鬘は四歳であつた。夕顔の乳母は手を尽してその行方を尋ねたが、何の手がかりもないうちに、夫が太宰の少貳に任せられて、筑紫へ下ることになつたので、幼い玉鬘の君を守つて任地へ赴いた。少貳は五年の任期を無事にすませたが、重病をわずらつて再起できないと知つたとき、十歳ばかりになる姫のことを妻や息子に遺言して死んで行つた。歲月は経つて玉鬘は侘びしい筑紫の地で二十歳の春を迎える。

玉鬘の巻に、「この君、ねびととのひ給ふままに、母君よりも勝りてきよらに、父大臣（昔の頭中将、今は内大臣）の御血すぢさへ加はればに

や、品たかく美しげなり。心ばせも、おほどかに、あらまほしくものし給ふ」とある。

玉鬘の美貌の噂は遠くまで風に乗って流れて行った。隣国肥後に住む太夫の監という豪族がいた。玉鬘の噂を聞きこんで、執拗に求婚を迫ってきた。乳母は、世間の目を晦ますために、孫は生まれつきの不具であると言ひ散らして遁れてきたが、監は、たとえ不具でも妻にしたいと言つて、自ら乗り出してくるようになった。乳母は、困り果てた末、長男の豊後の介に言ひふくめて、ひそかに舟出の準備を急がせる。監が、言葉を残してひとまず肥後に帰った、その間隙をうかがい、夜陰にまぎれて、にわかには海上に舟を浮かべる。豊後の介の姉は、縁づいていて子供も多く、一行に加われず、松浦の渚で悲しい別れをした。

付句の「遙けさは目を泣きはらす筑紫船」は、玉鬘の君の歌「行く先も見えぬ波路に舟出して風にまかする身こそ浮きたれ」を踏まえて、「いと、あとはかなき心地して、うつぶし給へり」とあるを句作りしたもの。

芭蕉の前句「寝まきながらのけはひ美し」は打越の句を受けてのものであるが、与奪自在の幅があり、句作りも巧みに出来ている。付句また前句の情趣をよく感受して、「筑紫船」の語に玉鬘の面影を写せた手並はさすがである。芭蕉の助言もあったであろうが、源氏物語が広く都鄙の門人の間に愛読されていたことを思わせる付句である。

8

冬の砧の涙きはづく

世の恨みいまだ六位の名によれば 翁

『俳諧芭蕉集』（享保九年、有隣編）の巻頭に、芭蕉の前句付として、六組の付合を収めている。その一組。『一葉集』には「みづから前句をなして付玉ひし分」として挙げる。制作年時は記されていないが、元禄二年、奥の細道の吟旅のあと、近畿圏滞留の頃であろうと類推される。

源氏物語の面影を寄せた付句が多く見られるのは『曠野』から『猿蓑』に至る期間であるが、元禄二年の歌仙に「六位」を素材にした付句が二つある。即ち、『曠野』、「ほととぎす」の巻、初裏の付合に「通路のついはりこけて逃かへり 野水」・「六位にありし恋のうはきさ 荷兮」とあり、また奥の細道の吟旅の際、小花沢での歌仙、「すずしさを」の巻、名残表の付合に「えんなる窓に法華よむ声 芭蕉」・「勅に来て六位なみだに 素英」とある。上掲の芭蕉の付合は、「六位」を素材にして、蕉風の面影の付けの手本とも言うべき技量を見せている。

前句「涙きはづく」とあるより、冬の砧に打たれるを六位の着用する浅葱の表衣と見立て、源氏物語、夕霧の元服を面影にした付句である。少女の巻、大殿腹の若君（夕霧）御元服のこと、を叙した段に「やがて四位になしてむと思し、世の人もさぞあらむと思へるを、まだいとまきはなる程を、わが心に任せたる世にて、しかゆくりかならむも、なかなか

か目馴れたる事なりと思しとどめつ。浅葱にて殿上に返り給ふを、大宮は飽かずあさましき事と思したるぞ、道理にいとほしかりける」とある。源氏（太政大臣）も夕霧を四位にしようと思ひ、世間の人もそう考へていたが、まだ弱年ではあるし、何事も意のままになるからといって、いちどに出世させるのも、却つて奥ゆかしくないと思ひ直して、わざと六位にとどめたのである。大宮（夕霧の祖母）はそれをひどく不満に思ひ、源氏の大臣にその旨を伝えると、大臣は、二、三年間、夕霧を大學寮に入れて、螢雪の苦勞をさせ、自分の亡き後も天下の器となるように修養を積ませたいと言つて、大宮を納得させる。この巻には、源氏の父親としての深い配慮が書きこまれており、他の巻々とは異色の味わいがある。

尚、この巻には、共に祖母の大宮に育てられた夕霧と雲井の雁（夕霧の従姉）との仲を父親の内大臣が離こうとして、ひと騒ぎ持ち上り、男君の乳母と女君の乳母の間に鞘当てがある。内大臣の意を承けた女君の乳母が二人の結婚に水を入れて、「めでたしとも（いかに夕霧が結構なお方だからといって）、物のはじめの（初めての縁組をするのに）、六位宿世よ（六位の聲君では情けない）」などと聞えよがしに陰口を言う。こうした状況の中の夕霧の心状を叙して、「男君、我をば位なしとて、はしたなむるなりけり（侮っているのだな）」と思すに、世の中恨めしければ（世の中が恨めしく味気なくなつて）、あはれ（女君に寄せる愛情）も少し醒むる心地して、目ざまし（心外なことよ）」とある。芭蕉の付合は、このあたりを心においてのものと察せられる。世に聞えた付合ではないが、蕉風

俳諧の面影の付けの範例とも言うべき実質を具えたものである。

余言に渡るが、夕霧と雲井の雁は、当時にあつては型破りの純情一路の恋愛結婚をし、子供もたくさん生れたとある。

9

秋の夜番の物もうの声 珍碩
女郎花心細気におけはれて 執筆

芭蕉は、元禄二年九月に奥羽行脚を終えた後、元禄四年十月末に江戸に帰庵するまで、まる二カ年ほどを近畿圏に過ごした。元禄三年の春、湖南の門人との間に成つた俳諧集が『ひさご』で、編者は珍碩である。この集は『冬の日』と共に連句だけの集で、歌仙五巻を内容とする。上掲の付合は「鉄炮の」の巻、初表の折端から初裏の折立にかけてのもの。

前句、秋の夜警が用心を呼びかける声とあるより、源氏物語、夕顔の君の面影を寄せた付けである。この君は、源氏に連れられて行った寂しい別荘において、妖しい物怪に襲われる。宵も過ぎてとろとろとした時刻、枕上に凄艶な女の生霊が現われて、めでたい方と慕っていますのに、構つても下さらないで、こんな見栄えのない人をお連れになつて、ご寵愛なさるのが心外で恨めしく、と言ひながら、側の女君を揺り起そうとする。物語のその段に「この君いみじくわななき惑ひて、いかさまにせむと思へり。汗もしとどになりて、われかの気色なり」とある。付

句は、ここに取材して、「女郎花心細げにおそはれて」と句作りしたのであって、上手な付句となっている。

源氏は、ただならぬけはいに起き上り、太刀を抜き放って枕上においた。夜風に燈火が消えている。控えていた留守を預る番人の息子に紙燭の用意を命じ、隨身に、妖魔を払いのけるために絃打をさせ、声を立てるよう申し付ける。常は近付けない番人の息子を近く召して、その手にした紙燭の明りで見ると、女君の枕上に現われたのと同じ姿をした女の影がぼんやりと写ったかと思うと、ふっと消えて行った。——昔物語ではこのようなことも聞いているがと、源氏は、薄気味わるい心地になったが、何よりも女君に添い臥して、声をかけて起すのであるが、もはや冷たくなっていて、息はすでに絶えてしまっていたのである。

10

女郎花心細げにおそはれて 執筆

目の中おおく見遣がちなる 野徑

『ひさびさ』、「鉄炮の」の巻の付合で、打越の「秋の夜番の物もうの声」から三句連続して、源氏物語に取材している。

前句、女が物怪におそわれて心細げにしているとあるより、その女の心身ともに疲れきったさまを付けている。この付句はまた源氏物語の面影を寄せたものであるが、夕顔の君の面影から葵の上の面影へと場面を切り替えることによって、変化を呼んでいる。そのこと、葵の巻に見え

る。

夕顔をおそった生霊は葵の上にも憑いて、この君を苦しめる。加持の僧どもが尊い法華経を誦して物怪の調伏にかかる。さすがの生霊も法力に責められて、心苦しげに泣き侘びながら、自分ではどうにもならない離魂の煩いを告白する。その声音やけはいは六条の御息所にそっくりであった。世間の噂通りであったかと、源氏は慄然とする。他方、御息所は、護摩に焚かれた芥子のおいがいつの間にか着ている御衣に滲みているのに気づいて、罪業ふかいわが身を疎ましい限りに思い悩む。

付句に当たる箇所は、葵の上に取り憑いた生霊が加持の僧に祈り伏せられ、葵の上が辛うじて正気を取りもどし、側に付き添うている源氏を見上げたときのさまである。即ち、本文に「例はいと煩はしく羞しげなる御まみ（いつもはひどく気むずかしく恥かしそうにしている眼差）を、いとたゆげに見上げて（さもだるそうに上げて）、うちまもり聞え給ふに（源氏を見つめているうちに）、涙のこぼるるさまを見給ふは（涙のほろほろとこぼれ落ちるありさまを、源氏が見るにつけては）、いかがあはれの浅からむ（源氏の愛情がどうして浅からうぞ）」とある。付句の「目の中おおく」は、本文の「御まみいとたゆげに」と同意であって、目つきのいかにもだるそうに見えるさまを言っている。露伴は、この付合もひきつづいて夕顔の面影と見ているが、この君は物怪におそわれるや、ひどく怯えて失神状態となり、意識を戻すこともなく、冷たくなってしまっているので、側の源氏を見遣るなどという余裕はさらになかったのである。付合の手法からしても、夕顔の君から葵の上へと場面の切り替っている方が変化の上か

らして好ましいのである。

余説ながら六条の御息所について簡記しておく。この君は前東宮の未亡人であり、一人の姫もあって、もはや生ぐさい憂世のことは諦めていたのである。が、若い源氏は情熱のおもむくままにこの君に迫って、せっかく冷えていた心に火をつけてしまう。ところが、そのあとは自分でも訝がるほど冷淡になってゆき、夜離の日がつづく。六条の君は、高貴な身分と高い教養を具えた女性であるゆえ、傷ついた心の痛みは深刻であつた。加うるに、四月の賀茂の祭りの日、御息所の質素な網代車が葵の上の美しい物見車の従者どもから惨々の恥辱を受けるといふ意外な事件がおこつた。このようにして御息所の心は乱れに乱れて執拗な怨恨のとりこになっていくのである。それはもはや自らの理性の制御を超えた別世界に燃えるもの凄くも妖しい業火であつた。姫は、伊勢の齋宮となり、六条の君も共に伊勢に赴くことになる。その下向の迫つた日、源氏は嵯峨の野の宮を訪うて六条の君との別れを惜しむ。源氏物語の中でも一入「あはれ」のふかい一段である。

やがて御代がわりとなつて齋宮は京に帰り、源氏の手厚い庇護を受けて、冷泉の帝の中宮に昇る。これが秋好の中宮である。

11

誓文を百も立てたる別路に 正秀

涙ぐみけり供の侍 珍碩

須磨はまた物不自由なる台所 正秀

『ひやう』、正秀・珍碩の両吟歌仙「あぜ道や」の巻、初裏の付合。

連句は長短、短長の二句々々がそれぞれ独立の世界を構成しながら進行する。上掲の付合は、二句々々の場面のいずれもが源氏物語、須磨の巻の面影を寄せている。しかし、前の場面は京を離れて須磨へ退居するところであり、後の場面は須磨における侘住居であつて、それぞれ異なる場面の組立によつて成つており、そこに変化を呼んでいる。

前句の「別路」を源氏が須磨への退居と見立て、随従の侍どもの悲しむさまを寄せている。源氏は、政敵である右大臣の寵姫朧月夜の君との情交が露見した為、身辺の危険を感じて、自ら都を離れて須磨への流寓を計る。前句の「誓文を百も立てたる」は、最愛の紫の上を中心においたことばと見られるが、昵懇の大宮、花散里のほか多くの人にも別れを告げての意である。朧月夜の君とはひそかに惜別の歌を交わす。須磨へのお供は良清・維光・前の右近将監の藏人等五、六人ばかり、下人も親しい者だけを連れて都を出る。付句の「涙ぐみけり供の侍」は、主君の失脚を悲しむと同時にわが身の衰えも感じて涙ぐんだのである。

次の付合は、前句に供の侍の涙ぐむとあるを受けて、「須磨」の趣向を立て、都から一変して、侘びしい浦辺の生活を付けている。その様子を「物不自由なる台所」と具象したところが蕉風の俳諧である。本文には「おはすべき所は、行平の中納言の、藻塩垂れつつわびける家居ちかき辺なりけり。海面はやや入りて、あはれに心すごげなる山中なり。垣のさまよりはじめて、珍らかに見給ふ」とあり、「わが身一つにより、

親兄弟をも別れ、かた時だに立ち去りがたく、程につけつつ思ふらむ家を離れて、かく惑ひあへるを思すに、いみじくて、」とある。この辺りの侘びを俳諧にした付句である。

12

物よくしやべる いわらじの顔 尚白

蒜の香のよりもそはれぬ恋をして 芭蕉

元禄三年、芭蕉の「月見する座にうつくしき顔もなし」を立句にして、近江の門人尚白との間に巻かれた両吟歌仙、名残の表の付合である。

前句の「いわらじ」は、いえあるじの転訛で、家の主である家さま、主婦の意。芭蕉の付句は、いわらじの「物よくしやべる」とあるを咎めて、源氏物語に出てくる「蒜の香」の女を面影に見せた俳諧である。その話は、帚木の巻、名高い「雨夜の品定め」の席で、藤式部丞の語った才女にまつわる話であるゆえ、その概要を記して芭蕉の付句の意図を明らかにしておく。

男は大学寮の文章生(文章道の学生)、女は、駈出しの博士などは恥かしくなるくらい漢文の素養を身につけており、討論すれば立板に水で相手に口を開かせないという才女である。男は、女の学才に惚れて逢い初めるのであるが、寢覚めの物語も、学問の話であったり、官人としての心得であったり、鹿爪らしい話ばかり、である。女の寄せる恋文はいつさい仮名を交えず漢文で書かれている。大学寮の学生である男は、こ

の才女先生から漢作文の手ほどきを受け、その方面では学恩を感じているが、可愛いといった女ではなかったので、長い間逢わなくなっていることもあった。何かのついでに思い出して立ち寄ったところ、いつものように居間に通してくれないで、物越しに声だけを聞かせる。さては無沙汰をしたので嫉妬を焼いているのかと思つたが、世の中の道理はちゃんと心得ていて、別に恨んでいるような様子はない。実は逢えない事情があつたのである。

女は、澁みない漢語口調で、「月頃風病重きに堪へかねて、極熱の草薬を服して、いとくさきによりなむ、え対面賜はらぬ。まのあたりならずとも、さるべからむ雑事等は承らむ」と、宣り給うた。男は、返事に困つて立っていると、なるほど蒜の香が花やかに襲ってくるので、「一言、「承りぬ」と挨拶を返して、逃げ出したという。

芭蕉の「蒜の香のよりもそはれぬ恋をして」は、物語のこのあたりを面影に見せた俳諧である。連句は座の文芸であるゆえ、考えながら付句をするといった余裕はない。前句の「物よくしやべる」の響きを機敏に聞きとつて、「蒜の香」の女を呼び出してきた手腕はまことに見事である。但し、尚白の前句の仕立は既に古風な所があつて、折角の芭蕉の付句を冴えないものとしている憾みが残る。

13

魚の骨しはぶる迄の老を見て 芭蕉

待人入し小御門の鑑 去来

芭蕉は、元禄三年四月、近江石山寺の奥、国分山の幻住庵に籠ったが、秋冷のころ栗津の無名庵に移り、翌元禄四年四月には嵯峨の落柿舎に入った。『猿蓑』は、この一年間程の間に芭蕉の指導を受けて去来・凡兆の撰した集であって、蕉風俳諧の円熟期を代表する内容を具えている。連句は歌仙四巻を収めており、上掲の付合は、凡兆の「市中は物のほひや夏の月」を立句とする歌仙の初裏に出ている。

前句を落魄した邸の門守の翁と見立て、その老いぼれた翁が通用門を鍵であけて、姫君の情人を内に入れたという付句である。この付合の余意にあるものは荒れるに任せた邸にひっそりと暮らす姫君のうち侘びたさまである。『去来文』に「源語常陸宮の佛」と、その典拠を示す。

源氏物語、末摘花の巻に「故常陸宮の、末にまうけていみじうかしづき給ひし御女、心細くて残り居給へるを、ことのついでに語り聞えければ、あはれの事やとて御心とどめて問ひ聞き給ふ」とあって、源氏はこの姫君の許に通いはじめる。去来が付句に取材している箇所は「御車出づべき門は、まだあげざりければ、鍵の預たづね出でたれば、翁のいといみじきぞ出できたる」という行である。但し、本文は源氏が門を出て行くところであるのを、付句は姫君の情人が門を入るところに模様変えしている。『去来文』に「古人のしたる事をその通りに句に仕候へば故事にて御座候。其故事とはちがひ申候」とある。即ち、故事を踏まえたと上で、俳諧独自の創意を働かせた句作りをする。それが蕉風の面影の付けである。

源氏は、夕顔の君があっけなく死んだあと、この君への見果てぬ夢を性懲りもなく追いつづける。内裏で召使っている女房に色好みの若女房がいて、故常陸宮の姫君が心細く暮している様子を何かの折りに話すと、源氏は「おかわいそうなことだ」と言って、姫のことをあれこれと尋ねる。「お心持や御器量など、立ち入ったことはわかりませんが、琴を唯一の友としていらっしゃいます」と言うと、源氏は「父親皇は名手であられたから、並々ではあるまい。姫の琴を聴きたいものだ」と、例の好気心をそえられる。この若女房は常陸宮の邸を自分の里のようにして親しく出入りしている者であったので、その手引きで姫の住む邸に通うようになるのであるが、姫は、ただもう引っこんでばかりいて、何の愛想もない。源氏は、折りを見ては訪ねているうちに、姫の様子に何か腑に落ちないところのあることに気づいた。が、夢を追いつづける心にはそれが何であるかはわからない。源氏はさんざんにじらされる。

雪の降る冷たい夜であった。源氏は、老いた侍女たちが生活の不如意を歎いている所を訪ねて、姫君と一夜を過したが、手さぐりのような逢いかたで、まだ姫君をあからさまに見たことはない。その朝方、白々と積った雪の光に、はじめてはつきりと姫君の顔を見たのである。

その段に「まづ、居丈の高う、を背長に見え給ふに、さればよと胸つぶれぬ。うち次ぎて、あな、かたはと見ゆる物は御鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、さきの方すこし垂りて、色づきたること、ことの外にうたてあり。色は雪はづかしく白うて、真青に額付こよなう晴れたるに、なほ下がちなる面や

うは、大方おどろおどろしう長きなるべし。瘦せ給へること、いとほしげにさらぼひて、肩のほどなどは、痛げなるまで、衣のうへまで見ゆ」とある。しかし醜なる面ばかりでなく、美なる面も「頭つき、髪のかかりばしも、美しげにめでたしと、思ひきこゆる人々にも、をさをさ劣るまじう、桂の裾にたまりて引かれたるほど、一尺ばかり余りたらむと見ゆ」とある。土佐派の源氏絵などにも、この姫君を描くときは、白く高い鼻の、さきの方が少し垂れて、紅花のように赤く色づいている顔は背後にして、黒髪の流れるごとき美しさだけを見せるという、巧みな手法を用いている。

源氏が、亡き夕顔に寄せる見果てぬ夢は無惨にもうち砕かれたのである。幻滅 (disillusion) の悲哀を痛的に味わされたが、さすがに姫の心象を傷つけることなく、その場を上手に繕って座を立った。朝の明るさの中で見ると、車を寄せた中門は古びて傾いており、松の枝においた雪ばかりが暖かそうに陽に映えていた。

余言ながら、源氏は、この姫君の哀れさが身にしみて、この後も真実の心から折々訪ね、姫君には絹・綾・綿など、老女房たちには着る物まで贈り、普通の人ならきまりが悪くてできないような内輪の世話をつづけたと、物語は記している。

隣をかりて車引こむ 凡兆

『猿蓑』、「鶯の羽も」の巻、名残の表の付合。

前句を身柄ある老女の病み上りの体と見立て、「隣をかりて」に、源氏物語、夕顔の宿の面影を寄せた付句である。二句の付け方は、別人を立てた格で、病み上りの老女に対して、見舞に立ち寄った貴人を向かわせた、向付である。次に、夕顔の巻の本文を引用して、この付合の肉付けをしておく。

「六条わたりの御忍ありきのころ、内裏より罷で給ふ中宿に、大武の乳母のいたくわづらひて尼になりける、とぶらはむとて、五条なる家、尋ねておはしたり」とあり、次いで、「御車入るべき門はさしたりければ、人して惟光召させて、待たせ給ひけるほど、むつかしげなる大路のさまを見渡し給へるに、この家の傍に檜垣といふもの新しうして、上は半部四五間ばかり上げ渡して、簾垂などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透影、あまた見えてのぞく。立ちさまよふらむ下つかた思ひやるに、あながちに長高き心地ぞする。いかなる者の集へるならむと、様かはりて思さる。御車もいたうやつし給へり。先もおはせ給はず、誰とか知らむと、うち解け給ひて、少しさしのぞき給へれば、門は藪のやうなるを押しあげたる、見いれの程なく物はかなき住まひを、あはれに、いづこかさして、と、おもほしなせば、玉のうてなも同じことなり。切懸だつものに、いと青やかなるかづらの心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり、ゑみの眉開けたる。云々」とある。

本文には、源氏の車を入れるべき門があいにく閉ざっていたので、門

瘦骨のまだ起直る力なき 史邦

のあくのを待ちながら、風情のある隣家のさまに目を遊ばせて、切懸めいた板囲いに白い花がひっそりと咲いているのにふと目をとめた、と記されている。付句に「隣をかりて車ひきこむ」は作者凡兆の俳諧である。蕉風の俳諧は、故事を直付にせず、故事の面影ばかりを自在に句作りすることによって、俳諧としての独自性を出すことを本旨とする。凡兆はそれを実演しているのである。

『慈心録』は、凡兆の「隣をかりて」は本説と違うゆえ、夕顔の宿の俳ではないと論じている。曲斎は、蕉風俳諧の面影の付けに対して正しい認識を欠くために、理詰め論に終始しているのである。『去来文』に「隣をかりては、夕がほ」とある。この巻の興行に一座した去来の言であるから何の疑もない。

15

最後に源氏物語に取材した蕉門の発句を一句掲げておく。

竹の子や児の齒ぐきのうつくしき 嵐雪

元禄七年、江戸蕉門の子珊編『別座敷』所収。

源氏物語に取材した発句は、連句の付合に比べて、ほんの教える程しかないが、その数少ない句の中で上掲の句の抒情は格別に美しいので特に取上げた。

六条院において、尼姿の女三の宮の許で、薫は二歳となる。そのかわいらしい生立ちを見ては、柏木の不倫の子であることを忘れて、源氏の

心にもしみみとした温い愛情が湧いてくる。横笛の巻に、薫の生長ぶりが鮮やかな筆致でなつかしく描写されている。その段に「御齒のおひ出づるに（齒の生えそめる頃なので）、くひあてむとて（物を噛もうとして）、たかうなを（笄を）、つとにぎり持ちて（ぎゅつと握りもって）、雫もよよと（涎でべとべとに）、食ひぬらし給へば（食い濡らしていると）」とある。

嵐雪の句は、本文のこの箇所を取材しているが、「児の齒ぐきのうつくしき」に、嵐雪独自の美意識が鋭く感覚的に働いており、源氏物語の懐かしい情趣を発句に形象して見せたためたい句となっている。

ひとしく源氏物語を取材しても、本稿の始めに掲げた『虚栗』時代の嵐雪の付合とは対照的に淳乎たる蕉風の発句として注目されるのである。